
Fate × 東方 あたしを誰だと想ってるの！？

リョク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e × 東方 あたしを誰だと想ってるの!?

【Nコード】

N 3 5 7 4 Y

【作者名】

リヨク

【あらすじ】

「俺を転生させる!」と、言う身勝手な存在のせい少年は正史で召喚する黄金の剣を持つ少女を先に身勝手な存在が召喚した。そして少年は参加することが出来なくなり、死ぬしかなかった……。

だがF a t e（運命）はそれを許さなかった、その代わりに召喚されたのは……我儚な天人だった。

*注意

この小説は独自解釈などがあります。

無双、最強系では無いのでその設定が嫌な人にはお勧めしません。

召喚と説明（前書き）

まさかのあの人がサーヴァントに！？
そんなお話始まります！！

召喚と説明

ある武家屋敷、そこにはその家の主である衛宮士郎しか居ない。

「ぐあッ!」

一人の青年、さっき話した衛宮士郎がそこには居た。

そして青い全身タイツ男が紅い槍を持って衛宮士郎の命を狙っていたのだ。

理由は一つだけ、衛宮士郎には心当たりがあった。

先ほど、学校でこの全身タイツ男と戦っていた白と黒の双剣を持った赤い男と鎧を着た金髪の少女が戦っていたのだ、その人外の戦いを見ていたことに気付かれ、必死に校内まで逃げたのだ。だがこのタイツ男に追いつかれ槍で心臓を貫かれたのだ。

その後、何故か知らないが校内で目を覚まし家に帰ったのだ。服についた赤い血と傷口も消えていない状態だ。

その後、今度こそ命を取る!と言わんばかりになぶられているのだ。

そして衛宮士郎はタイツ男に腹を蹴られ、一般人から見ても物置、魔術師どころか半人前の衛宮士郎にとっては工房だった。

……正史であればここで衛宮士郎のサーヴァントになる少女、セイバーが現れるだろう。

……だが生命に反逆し記憶を持ったまま転生した存在に召喚されている……。

つまり彼には聖杯に参加することは出来ないのだ。

「ほお、魔術師だったのか」

タイツ男は工房を見てそう言った。

「まあいつか」

そう言ってタイツ男は紅い槍で衛宮士郎の命を奪おうとした。

――俺は……こんな所で死ぬのか？
――嫌だ！！死んで……死んでたまるか！！！！

だが物語には奇跡が起こった、いや、世界が彼の死を望まなかった
と言っべきか……………

突如、床に魔法陣が現れ、そして地面が輝いた！

「おい……………まさか……………八対目か！！？」

光り輝いている魔法陣の上にエーテルで身体が構成される……………それは次第に人の形になり、光が収まった瞬間タイツ男に蹴りをかました。

「ぐあ……！！！」

タイツ男は蹴りでぶっ飛び工房から追い出された。

「はあ」

士郎はその溜息をはいた主、さっき魔法陣から現れた存在を見た。
その格好は現代風の服に似ており、髪は青い長髪、黒い帽子に桃を

着けたあまりにもふざけたファッションだった。

士郎はその少女の姿をずっと見ていた、とても可愛らしく、そして美しい外見だった。

見惚れるのは当然だった。

「全くあの妖怪め……………いくら退屈と言っても私を飛ばすなんて嫌いだから？まあ私も嫌いなんだけどね、アイツのこと」

少女は少しだけ早口で言った、そして士郎の方を向き……………

「サーヴァント・エンゼル、とても言って置くわ。貴方が私のマスターね、まあ仮初だけどね、でも私を楽しませてね、退屈は嫌いだから」

青髪の少女はそれを楽しそうに言った、まるで新しい玩具貰った子どものように無邪気だった。

「なるほどなあ」

二人は声がした方を向いた、そこにはさっきぶっ飛ばされた青いタイツ男が居た。

「もう少し寝てなさいよ、永遠に寝ててもいいのだけれどね」

エンゼルがそう言うのとタイツ男は鼻で笑った。

「ハンツ！そんな事する訳ねえだろ、それにサーヴァント同士が会ったら如何するか分かってるだろう？」

「ええ、そうねランサー、なら」

「そんじゃまあ……………」

「「戦いましょうかッ!」」

二人は互いにそう言い合うと、互いの獲物を取り出した。

タイツ男、ランサーはさっきまで使っていた紅い槍を、エンゼルはオレンジ色に光り輝く鍔の無い両刃の剣をそれぞれ持ち、ぶつかり合った。

甲高い金属音が響き渡る……………ランサーの槍を剣で受け流すように反らす、そして槍を回避し接近、切りかかろうとした。

ランサーも負けじと突き出した槍を戻し、今度こそエンゼルを貫こうとし、突いた。

これはかわせないとランサーも確信し、そのままランサーの槍に貫かれた……………

かに思えた。

ランサーの槍は先端が少しだけ刺さっているだけだった。

ランサーは力を入れるが貫ける気配が一向に無い……………そして槍を引こうとしたが既にエンゼルの刃はランサーの頭を捕らえていた。

そしてそのまま切り裂かれた。

「…………ツチ…………避けられたわ」

「……………今のは危なかったぜエンゼル」

ランサーは斬られる瞬間にマトリクス顔負けの避け方をし、頬を少しだけ深く切り裂かれた程度だった。

流石は最速サーヴァントであるランサーだ、他のサーヴァントなら今の攻撃でまず間違はなく死んでいたであろう。

ランサーは腕で頬に流れている血を拭う、その顔には確かな愉悦があった。

「エンゼルのクラスってのはそんなに硬えのか？」

「ええ、そうね。私から言わせれば鍛え方が足りないと言っても置くて置くわ」

「よく言っぜ」

ランサーはそう言いながらも槍に魔力を込めていた。

「じゃあもう手加減はいらねえな……………その心臓、貰い受ける」

ランサーは走り出し、跳躍する。

エンゼルはそのままたっていた。

「ハアアアアアアアアアアアッッ！！！！ゲイ・ボルク刺し穿つ死棘の槍！！！！

「！」

ランサーによって投擲された紅い槍、ゲイ・ボルクは紅い閃光となり、エンゼルの心臓を狙う。

エンゼルは少し走ってかわそうとするがその槍は屈折し、そのまま心臓を貫いた。

それを見たランサーは顔を顰めていた。

「……………ッチ！この程度か」

余りの呆気なさに

ランサーはエンゼルの近くに行き槍を抜こうとした。だがランサーの顎にエンゼルの膝蹴りが炸裂した。

「ベフ！！？」

「……………全く、服を汚してくれて……………」

エンゼルはそれに怒りを覚える。

「ちょっと待て！！ゲイボルクで心臓貫かれたんじゃないか！！何で死んでねえんだよ！！」

それも最もだ、普通は心臓に槍が刺さった時点で死ぬ……………、だが普通じゃなければ……………」

「天人にとつての死は死神に五衰を与えられる事……………それ以外で死ぬわけ無いでしょ、痛いけど」

そう、エンゼルのクラスにはA以上の固有スキルが与えられる、それは不老不死だ。

このエンゼルと言う名のクラスには不老不死のスキルがある、まともに対しても普通に勝てる、言ってしまうえば強すぎる為にめったに召喚されないのだ。

本当の意味でエンゼルのマスターにとつては一番いい存在でもあり、最悪な存在でもある。

不死殺しの伝説、又は宝具を持たないサーヴァントでは勝てない為、マスターを狙うしかないのだ。

その為マスターは常に全ての敵マスターに命を狙われないといけないのだ。

「まあアンタにも簡単に分かるように言うわ」

「……………俺ってそこまで馬鹿に見えるか？」

「少しだけ見えるわ、でもクランの種犬と言われたクー・フリーンには分からないでしょ、日本の宗教なんて」

今エンゼルはランサーの真名と同時にものすごい事を言ってしまった。

「まあな……………って誰が種犬だコラあああああ！！！！」

「アンタの師匠のライバルの女を孕ませたじゃない」

「ち、ちが……………」そこで動揺するんじゃないわよ、ぶっ飛びなさい」

「ちょ、まっ」

ランサーが明らかに動揺していたのを良い事にエンゼルは手を翳す。

「かなめ石」

エンゼルがそう言うのと大地から注連縄が付けられた巨大な石が出てきた、エンゼルはそれをランサーに投げつけようとした。

「……………つち……………わりいがここまで……………マスターからの命令が来た……………」

「そう、なら帰りなさい、逃げる相手に興味は無いから」

エンゼルがそう言うとかなめ石を下に下げた。
どうやら飽きたようらしい……………。

「すまねえな、この決着は必ずつける!!」

そう言ってランサーは立ち去った、エンゼルも少しだけ次の戦いを楽しみにしていた。

そしてエンゼルは何かを思い出す。

「あ、すっかり忘れてた、マスター大丈夫？」

エンゼルはすっかり放心状態だった赤毛のマスター、衛宮士郎の方に向いた。

「…………マスター、大丈夫だった？」

「あ、ああ……………今は……………それよりも君は」

「ああ、ちょっと待って、今説明するから、どうせ何も理解していないマスターだって事は分かっているから」

エンゼルは士郎の方に歩き出した。

少女説明中

「で、どうするの？」

「…………この町でそんな戦いが……………止めないと……………」

「まあそれが一番いいでしょ、でもその為には他のサーヴァントを全て倒さないといけないわよ?」

「……………戦うしかないのなら……………」

「迷ってるならまだ決めなくていいわ」

「いや、俺は正義の味方として……………何も関係ない人を危険に晒させない為に……………この聖杯戦争を止めなくちゃいけない……………」

士郎は必死に考えそれで答えを出した。

「まあそれが正論ね、正義の味方ってのは少し可笑しいけれど……………コレからよろしくね、マスター」

「ああ、エンゼル」

召喚と説明（後書き）

一応アンケート？取ります。

次の三つの中からラストはどんな風なのがいいか選んでください。

- 1 ・ハッピーエンド
- 2 ・トゥルーエンド
- 3 ・両方！

一応この中から決めます、投票は今のところ無期限です。
投票お願いします！

ステータス・エンゼル（前書き）

短編の時の設定では強すぎたので改善します。

本編を楽しみにしている方はもう少しお待ちください。

風邪を引いていたので………

ステータス・エンゼル

【クラス】

エンゼル

【マスター】

衛宮士郎

【真名】

【性別】

女性

【属性】

混沌・善

【能力】

筋力 C + 魔力 B

耐久 A + + 幸運 E -

敏捷 C 宝具 E X

【クラススキル】

不死：内臓などの損傷は再生できる、ただし肉体の一部が欠損した場合はその欠損した部分が無ければ再生できない。

上半身と下半身が分かれたり、首が千切れたりすると
流石に死ぬ。

【保有スキル】

単独行動：C

マスターからの魔力供給を断つてもしばらくは自律行動可能。ラン
クCならば、一日は現界可能。

カリスマ：E -

普段の態度や行いで殆ど機能されていない。
彼女と話すだけで僅かながら殺意を沸く。
ただし例外として鈍感な者や自分の過去を知るものには効かない。

戦闘続行：C

本来の場合は瀕死の重傷を負っても戦えること。
エンゼルの場合は往生際が悪いだけ。

怪力：B +

怪物的な意味合いの怪力ではなく天人としての怪力。
一時的になら筋力をA +まで引き上げる。

戦闘開始

「ん、美味し」

サーヴァント・エンゼルはそのマスター、衛宮士郎のお菓子である饅頭を頬張っている。

士郎は台所で食事の準備をしている、誰の？エンゼルのに決まっている、なんで料理を作っている理由は………

「お腹空いたから何か作って」

その後「お菓子でもつまんで待ってるわ」と、言い士郎を台所に立たせた。

エンゼルは台所から匂ってくる、料理の匂いをかぎながら楽しみ待っていた。

だがエンゼルは表情を一瞬で変え、台所に行き士郎に話した。

「サーヴァントが来るわ、それも二体」

「何だって！！？」

士郎は驚いていたがエンゼルは冷静だった、彼女であるならば普通は喜んだりするのであるが………。

「流石に二体相手じゃかなりやばいわ、取り合えず逃げましょう」
そう言つてエンゼルはかなめ石を取り出し、目線で「乗れ」と言つて来た。

士郎はそれに乗るとエンゼルもそれに飛び乗り空を飛んだ。

そしてそれと同時に一本の矢が飛んできた。

「……………どっしり乱麻」

黒髪のツインテールで赤い服を着た少女、遠坂凜が一人の男に話しかけていた。

男は銀髪で赤と蒼のオッドアイ……………本当にこんな人がいるんだなあ……………と、思わせてくれるような人間であるならばまず間違はなく絶対にありえない容姿をしていた。

そう、コイツこそが諸悪の根源である、一神乱麻だ……………下手に名前まで中2が考えるような名前だったら最早救いようが無かった、既に救いようが無いけど……………。

「そうだな……………本来なら記憶を消したいところなんだが……………もう遅いかも知れない、既にランサーの餌食に……………」

乱麻は困ったように言っているがコレは建前である、本心はこつちである。

「（今ここでアイツを救えばどうせ正義の味方だからほっとけないとかで乱すんだ、そもそもあいつ自身が居なくなれば俺が主人公になるんだ、アーチャーもあいつのせいで苦しんでるんだ、死んだ方が良いに決まってる。セイバーも俺が召喚したし、もしもイレギュラーでサーヴァントを召喚しても俺のセイバーの方が強いに決まっている）」

明らかに士郎に対して強い殺意と嫌悪感を抱いている。
自分は特別な人間だ、とも思っているのか？

「（大体なんで神は俺に無限の剣製をくれなかったんだ！？士郎なんて魔術を使えない落ちこぼれ出いいんだよ！！）」

乱麻は神に対して怒っている、だが彼には無限の剣製は扱えない、別の世界ならともかくここはその本来の担い手が居る世界。

固有結界は一つ一つ違うのには理由がある、固有結界は発動した魔術師の心象風景なのだ。

無限の剣製は衛宮士郎でなければ体得できないのだ。

「（だがあの偽善者は本来の魔術を使えない、そしてそれを知る者は居ない！！体得する前に殺しちまえば！！）」

だが彼の予想は外れることになる、士郎が召喚したエンゼルがあることに気付いて……………

「マスター！今からなら間に合います！！」

青いドレス服の上に鎧を着た少女、セイバーが乱麻にそう言った。

「そうかもな、よし！行くか！！」

「（死体の確認でもしてやるか）」

そして衛宮家の近くに来て……………

「マスター、あの小僧と一緒に居るサーヴァントが居る」

赤い服を着たサーヴァント、アーチャーが喋った。

「それはランサー？」

「いや、あの小僧の手に令呪がある、つまりあの小僧は……」

アーチャー自身も少し驚いていたが次の言葉を口に出して言う。

「マスターだ」

「マジ？」

「ああ」

この時のアーチャーの心情は………全く信じられなかった。

アーチャーにとってこの世界は全く違った世界だった。

このままでは衛宮士郎語殺しも出来ない、しても意味は無いと思っていた。

彼の最愛の人であるセイバーは知らない男に召喚され、凜はありえないほどベタボレだ。

唯一の救いはセイバーがまだ完全にこの男に気を許していないと言う事だった。

この男は常に魅了^{チャーム}の魔術を使っている、正確にはそれに近い何かだ
つたが……。その為彼女も完全に心を許す事は無く、常に一線を引いている状態
なのだが。

だが何かの偶然か衛宮士郎はサーヴァントを召喚していた、青い長
髪の桃帽子の少女だ。

少なくとも見たこと無い少女だった、そしてとても人間離れしてい
た。

「（何だあのサーヴァントは………？）」

少なくとも英霊ではない、恐らく亡霊でもない、生前の肉体をエー
テル体に変え、サーヴァントと対等に戦えるようにしたような感じ
だ。

それがランサーと同等に戦えるようになった本当の理由だ、エンゼ
ルももし生きて帰れる事が出来、その後英雄になるような行いをす
れば英霊にいたる事は出来る。

「（あんな存在は見たこと無い！！）」

そう、アーチャーにとっては全く分からない存在だった。

まだ不確定要素がありすぎるため………攻撃はまだしないようにし
たかった。

「アーチャー！！狙え！！」

だが一神乱麻はアーチャーに命令をした。

「な！！マスター貴方！！」

「ちょっと待ちなさい！！」

二人の少女はそれを止めようとする……………。
だがアーチャーには止める理由が無い——！！

「……………了解した」

そう言ってアーチャーは黒い弓を取り出して……………

——衛宮士郎を狙って放った。

その矢はしっかりと士郎に喰らい着くように吸い込まれていくように進む。

だがその矢はかなめ石に当たり外れた、否、先に士郎が避けたのだ。正確にはエンゼルがそうさせたのだが……………。

エンゼルはそのまま浮上し、橙色に光る剣を振るう。
その刀身から橙色の斬撃が掃射され、アーチャー達に向かってきた。

その斬撃は七つに別れ、そのまま四人を襲う……………。

—— 第二話・戦闘開始

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3574y/>

Fate×東方 あたしを誰だと想ってるの！？

2011年11月24日17時56分発行